

きんせい ひと
近世の人びと
 (江戸時代)

徳川家康が江戸の町づくりを始めると、江戸川区でも新田開発が盛んにおこなわれました。宇喜新田を開拓した宇田川喜兵衛をはじめ、田島図書(一の江新田)、篠原伊豫(伊豫新田)の3人の新田開発が知られています。

彼らは開拓農民をあつめ、費用を負担し、開発を指導しました。

また、幕府は行徳の塩を運ぶため、船堀川を整備拡張して新川を開きました。そして、江戸の



一之江名主屋敷の主屋(昭和33年)



成田山不動明王
石造道標

て、江戸の発展とともに江戸へ物資を運ぶた

めの舟運が盛んになりました。

東北や北関東の物資は、陸路や江戸湾経由の船便に頼っていましたが、江戸川が整備されると、銚子から利根川をさかのぼり、関宿を経て江戸川を下り、新川、小名木川を

通って江戸城下へ運ばれていきました。江戸川区には、元佐倉道、岩槻道、行徳道などが通っていたため街道は旅人たちでにぎわっており、また江戸川や新川といった河川は往来する舟によってにぎやかでした。

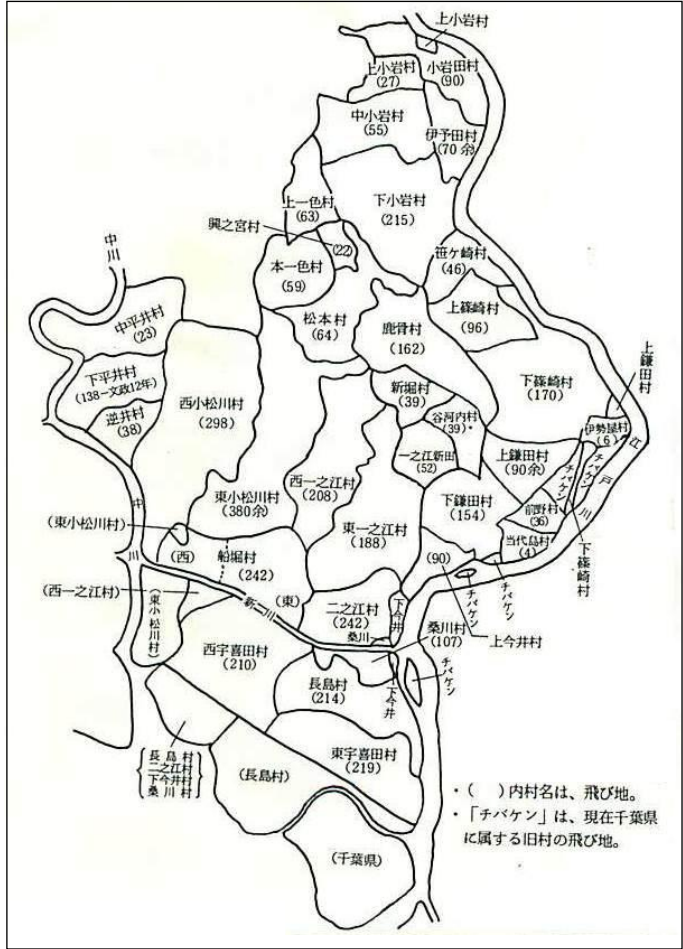
せんじゅ 千住(足立区)からにいじゅく 新宿(葛飾区)を通して小岩へ出る佐倉道は、小岩市川の渡りで江戸川を渡りました。江戸と房総を結ぶ重要な街道でしたから、小岩にせきしよ 関所が置かれ江戸に出入りする人々の取調べにあたっていました。なかねへいざえもん 中根平左衛門という人が、代々この関所の役人をしていました。

江戸の町に人口が増えると、大量の野菜が消費されるようになりました。舟運の便のよい江戸川区の村々は、そうした野菜の供給地となっています。

そのほか、区内に豊富に生えていた竹やヨシを利用した手工業も発達し、冬から春にかけては葛西沖の海苔や貝類をとって、農業以外の収入源としていました。

しかし、土地が低く、河川に囲まれた江戸川区の村々は、たびたび洪水に襲われました。また、土地が平坦で用水路も水源から遠いため、長い間雨の降らないときは水不足に悩まされました。自然災害が大きな被害をもたらす時代であったため、人々は多くの困難とたたかいながら自分達の暮らしを守ってきたのです。

江戸時代は徳川幕府が政権を維持するために、農民にいろいろな制約や負担を課した時代です。農民は毎年幕府に年貢を納めなければなりません。また、江戸川区は幕府の御鷹場であったため、鷹狩りの人足にも駆り出され、農作業や年中行事、日々の生活へもさまざまな制約を受けました。



江戸時代の江戸川区の村々
 ()内は文政6年(1823)の戸数

江戸川区郷土資料室